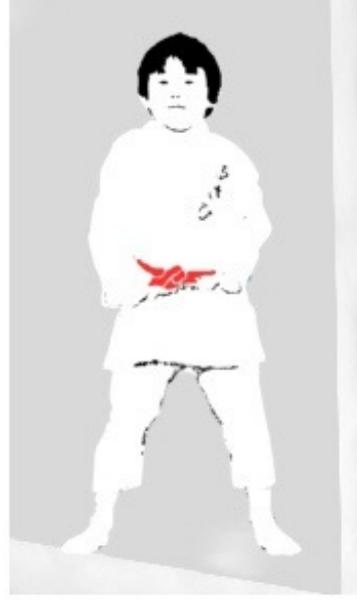


こんな柔道、見たことない！



あさひは柔道場の中央で白い道着に赤帯をキリリと締めて、決勝の相手と向き合っている。道場に差し込む春の日差しが、四角に縁取られた赤い畳を鮮やかに映し出している。わが息子が少年柔道大会に出場し、あれよあれよと決勝まで勝ち進み、いざ決勝が行われようとしている。あさひは小学校に上がったばかりのピカピカの一年生で、柔道を始めて半年になる。まだまだ幼児の域を出ていない。

あさひは連戦の疲れから少し肩を落としているが、良い緊張感にあるのだろう決勝に向けて集中しているようだ。私と妻と娘の奈々子も、大勢の人垣の中から、不安と期待で緊張しながらあさひを見詰めている。

「はじめ！」

審判の大きな声がする。

私はこの決勝の模様を書く前に、この幸運な場面を迎えるまでの、私たち家族の暮らしぶりを聞いて貰おうと思う。

※

私たち家族が、北九州市の小倉の都心部にある公団アパートから郊外の南区徳力という町に引っ越して来たのが8年前。バブル経済のあの時期に新築マンションを何気なくローンを組み購入した。小倉の街には小倉駅から直角に街の郊外へ延びるモノレールが走っている。このモノレールが出来て以来、沿線地域は新興住宅が増え新しい町が形成された。そのモノレールの終点付近にあるのが徳力だ。

引っ越してきた時、あさひはまだこの世に存在してなく、妻と一歳の奈々子の三人だった。入居したマンションの名前はリンデンハイツという。町内会の名称もリンデンハイツ町内会となった。自治会の連合会長が、古くからある町内会に入るより、小さくても独立した町内会で運営した方が良さだろうと、マンション住人二十軒だけの町内会にしてくれた。それが良かったかどうか分からないが、そのため町内会の出事が多かった。

そしてもう一つ、マンションには管理組合という厄介なものがある。マンションなどの共同住宅

は所有者全員でマンション全体の管理を行うのである。殆どの入居者がこの管理組合について知識がなく、分譲会社もこれが初めての分譲物件だったらしく、組合指導に手慣れてなかった。仕方なく、入居者で役員決めから規約の作成、駐車場の配置から建物の修繕、素人の頭で四苦八苦しなうながら何とかそれぞれの役を務めた。いや、務めさせられた。二十軒しかないのだから役が廻って来るのは仕方がなかった。

※

そんな中、一年ほどすると妻のお腹に第二子が宿り、国立病院の産婦人科へ夫婦で出かけた。

「これが頭、これが手でしょ、それで、これが・・・ね。分かるでしょ。先生によってはハッキリ言う

人もいるけど、私は言わないの」

と、女医の先生は妻のお腹にエコーの機械をあて、モニターを見ながら言った。私も妻もモニターを食い入るように見て頷いた。私は半信半疑ながら男の子だなと思っていた。しかし、帰り道で妻は女の子だと言う。

「モニターに映ってた股間のこんもりした物は何だよ」

と、私が言うと。

「でも、ツルっとしていたでしょ。男の子だったら影のような突起物が有るんじゃない」

と、妻は言う。

どうしてハッキリ言ってくれないのだろう。私と妻は結局、男か女か分からずにいた。

それから何週間か後に、奈々子を連れて実家に帰って居ると、妻から電話が入った。

「男の子だって、先生にハッキリ聞いたら教えてくれた。分からずに居たのかと笑われたけど」

と、妻は私が喜ぶだろうと嬉しそうに話した。そんなこんなであさひは元気な男の子として誕生

した。

あさひは妻の栄養の良い爆弾のようなオッパイを吸い。巨大な赤ちゃんになった。近所の奥さんが我が家を訪ねては、寝転んでいるあさひを抱き上げようとして「うっ！」と、重そうにしてい

た光景が今でも目に浮かぶ。

※

我が家のマンションは七階建てだが、いささか普通ではない。段々畑のように山の斜面に沿って斜めに建っていて、各階の屋根は上の階のベランダになっていてスライドして建っている。入居者はその広いベランダをテラスと呼んでいる。そのテラスにブランコや三輪車を置き、奈々子とあさひが遊ぶ姿をビデオに撮ったり、七夕の日は夜空の星を眺めながらソウメンを食べて、快適な生活だった。

そんな折、マンションの者にとって一大事が起こった。マンションの前は平坦な市街地が広がるが、目の前に志井川という川が流れている。川はぐにやぐにやに蛇行していて、それを真っ直ぐに改修するという。それでマンションの前に架かっている古い橋を取り壊すと、市の建設課の立看板が橋のたもとに立てられた。

マンションの者は慌てた。早速、管理組合の理事長の奥さんが市に事情を聞きに行ったという。その話を私は妻から聞いた。

「山田さんが市役所に行って川の計画を見せて貰ったって。そしたら新しい橋は架けないんだって。だから右か左にぐるっと迂回しなきゃいけないって」

確かに橋を渡って真っ直ぐに百メートルも行くと、モノレールの徳力駅がある。橋が無くなれば不便になる。住民から不満の声が上がるのは当然だ。

しかし、私はその計画を知っていた。何故なら私は市役所の公共事業の仕事を請け負う測量設計の会社に勤めていて、その志井川の計画も私の会社の技術者が書いた物だったからだ。ただ、請負契約の約款に秘密の保持という条文があり、仕事上で知り得た情報は外部に漏らせないことになっている。

私は直ぐに陳情書を書いた。これに皆の署名と印鑑を貰うよう山田さんに頼みなさいと、妻に渡しておいた。

「現在あるこの橋は、私たちマンションの二十世帯が毎日、通勤通学に使っている生活道路であり、取り壊されては困ります。また、新しい河川計画においても遠く両サイドに橋の計画が有るようですが、橋と橋との間隔がそうとう長く不便であります。また、私たちマンションの上や横にも新しいマンションが建つ計画があると聞いています。これから人口の増える地域ですので、現在ある橋の位置にも新しい橋を造って頂きたい」

翌日だった。山田さんの奥さんは私より一回りは年上だろうが、NHK 9時のニュースキャスターに顔が似ていて、品の良い美人なのだが、その日は慌しく息を切らして陳情書を持ってやって来た。

「昨夜、みなさんの所を廻って貰って来たんです。早くしないといけないと思って」

と、二十人の署名印入り陳情書を見せた。そして、何処へ持って行けば良いのか聞くので、私は一緒に役所に行く約束をした。

翌日、私の車で奥さんを伴い建設課へ向かった。途中、奥さんは私にこのマンションに移り住んだ動機や、妻が決めたのか私が決めたのかなどと聞く。奥さんは一大決心したらしく、移り住んでからの悩みを打ち明けた。前は近くのアパートに住んでいたのだが、娘さんがピアノの先生を目指して熱心に練習していたらしく、アパートでは近所迷惑、かといって一戸建ては経済的に

無理なので、近くで始まったマンション工事を見て、この段々になった構造ならピアノの音もあまり響かないだろうと購入したという。ところがやっぱり上下階の住人から苦情が来るらしく。恐縮しているという。

役所に着くと早速、建設課の河川係長に陳情書を渡した。

「今日は仕事で来たんじゃないありません。私もこのマンションに住んでいるので、一般市民として来ました」

と言って、理事長の奥さんを紹介した。係長は不可思議な顔をしていた。奥さんは是非ともよろしくと嘆願するのだが、係長が担当が不在なので帰ったら検討させて頂くと言うので、私たちは余りくどくど言わず退散した。その方が好感を持たれて有効なことを知っていたからだ。

「たぶん新しい橋を造ってくれますよ」

私は帰り道でそう行った。そうでしょうかと心配する奥さんに、その理由を説明した。

新しい橋を造るのに反対者がいないだろうこと。今の橋を撤去しないと河川工事が始められないため住民の協力が必要なこと。すると新しい橋を架けてやろうとなる。私はそう踏んでいた。

数日後、妻から陳情の翌日、建設課の担当職員の名刺が山田さん宅の郵便受けに入っていたと聞かされた。きっと橋の撤去に反対されて慌てて訪ねて来たのだろう。山田さんの夫婦は共稼ぎで昼間は留守なのだ。マンションの階段を駆け登り、留守の山田さん宅のドアにたたずみ、困ったあげく名刺を郵便受けに入れて行った光景が目につく。私は発注者と受注者の関係だが、その若い担当職員をよく知っていた。すまないと思った。しかし、何とかしてくれるだろうと思った。

その後、私はこの橋の件に関係しないことにした。何故かという、ある人物がこの件に関係して来たからだ。ある人物とは、このマンションの管理組合運営に協力してくれない同じマンション住人の一人だ。その人物は老人で、

「自分は既に隠居しているが司法試験にも通っている法律博士だ」

と言ひ、何をしている人なのか得体の知れない人なのだ。ただ、口端に学歴を馬鹿にするような言動があり、権威主義者であることは間違いない。その老人は共同住宅の特殊性が理解できず、駐車場の抽選会にも参加せず、

「私は駐車場を含めてマンションを買った」

と言ひ、一等地の駐車場を占有して譲らず、使用料も払おうとしない。そして、組合から脱退したいと、組合総会にも参加しないのだ。私たちはその老人を問題者として扱っている。

山田さんはその老人から、

「陳情書を持って行く場所が違う。私が知り合いの市議員に頼んで建設局長に陳情するから私に任せなさい。橋が有ると無いのではマンションの評価額が違ってくる」

と言われ、憤慨しているという。

私はその話を妻から聞いて手を引いた。やりたいようにやれば良い、ただ担当職員が上から命令されるのは気分が悪いだろうと感じた。

※

奈々子が幼稚園に入園する年、あさひが一人歩きを初め、勝手に道に飛び出すので目を外せなくなった。私はアイデアショップで胴にたすきバンドをし、ロープで引っ張る安全帯なる物

を買い、それをあさひに付けて街に出ることにした。うどん屋のおばちゃんが、まるで猿回し状態の私たち親子を見て微笑んでいた。

そんな折、私たちに嬉しいニュースがあった。北九州に大きなテーマパークができるという。宇宙をテーマにしたスペースワールドだ。私たちはその開園を待ち焦がれ、開園すると直ぐに喜び勇んで出掛けた。奈々子は着ぐるみのキャラクターショーに興奮し、私たちはスペースワールドの常連となった。と言うより、日曜になると「ゴーに行くぞ！」と言って私がみんなを駆り立てていた。ゴーとはショーの中で歌う「Go・To・The・スペースワールド！」のGoのことだ。私たちは本当に幸せを感じていた。

※

ある日、妻が今度の週末は幼稚園の入園申込みに並んでと言う。妻は奈々子を地元の幼稚園では一番評判の良いS幼稚園に入れたらしい。S幼稚園では毎年熾烈な入園競争があっているらしく、受付日の前日から父兄が並んで順番を待っていると、妻は近所の奥様方から聞き付けて来たらしく、私に土曜の夜から並んでくれないかと言うのだ。

嘘だろうと思った。一晩中、門の前で並ぶのか。東京ならそんな話も聞くが、こんな地方都市でそんな過酷な競争があるのか。私は信じられなかった。妻は去年の状況を詳しく聞いたらしく本当だと言う。子供たちの数は少なくなっているが、人気のある幼稚園には集中するのだと言う。私は父性愛を發揮し、仕方なく出掛けることにした。

土曜の夜、妻から、

「後で様子を見に行くからね」

と言われながら、神社の境内の中にある幼稚園に向かった。

薄明かりの境内を進むと白い建物の幼稚園が見えてきた。人影が幾つか動いている。近付くと建物の壁に沿って10人ほど、壁にもたれたり座ったりして本当に並んでいる。門の硝子ドアには日曜日の午前九時、入園受付と書いた白い紙が貼ってあった。父母たちを見ると寝袋や毛布・カイロを持参していた。辺りを見回しても園の関係者は誰も居ないようだ。硝子ドアの中も赤い豆球が一つ灯っているだけだった。私は覚悟を決めた。境内を出て公衆電話から妻に防寒着を持って来るように言い、また境内に戻って父兄の12番目に並んだ。

一時間ほどすると妻が子供たちと一緒にやって来た。建物の土間に毛布を敷き、暫く家族で待っていた。夜も遅くなり冷え込んできたので妻と子供を帰した。10時過ぎころ、さあ一防寒着に身を包んで徹夜の覚悟をしなくちゃと思っていたころ、しきりに境内の社務所から背広を着た一人の男性が行列している父兄の様子を見に来るようになった。その人は幼稚園の事務長らしく、30人ほどになった列に向かって言った。

「皆さんの電話番号を聞かせて下さい。明日の朝、受付が始まりましたら、人数の状況を見てこちらからお電話しますので、自宅で待機しておいてください」

助かった。何とか便宜を計ってくれるようだ。渡されたメモ紙に名前と連絡先を残し帰ることにした。帰ると妻はどういう事なのと聞くが、とにかくそういう事だからと、朝早くから電話

が鳴るのを待った。八時過ぎだろうか、連絡があった。今から来てください言うので出掛けると、事務長は順番なしで受け付けてくれた。奈々子はS幼稚園に通うことになった。

※

奈々子の誕生には大変な思い出がある。お産に日の思い出だ。まだ公団アパートに居た頃で、妻は奈々子を産婦人科の個人病院でお産した。

その日、妻は破水して病院に居るといので私は駆けつけた。個室で2、3時間の陣痛の後、妻は分娩室に運ばれた。外はどしゃ降りの雨で雷が鳴っていた。私はポツリと置かれた小さなスチールベットを見詰め、分娩室の物音に耳を立てていた。その時間が長かったのか短かったのか、その後の事が長くて覚えていない。分娩室から赤ん坊の泣き声がし、直ぐに看護婦さんに運ばれて、赤ちゃんは私が見詰めていたベットに乗せられた。そそくさと出て行く看護婦さんに、

「女の子ですよね」

と訪ねて、生まれてきたばかりの奈々子を見詰めた。そして奈々子と二人きりの時間が何故か長く続いた。大変だったのはそれからだ。分娩室から先生たちが出て来ない。慌ただしい物音と緊張した気配がする。分娩室のドアの音がし、先生が私の所へやって来た。

「分娩の後、母体の出血が止まりません。ここでは手に負えないので国立の総合病院に運びます」

と白髪の初老の先生は言う。それから私は呆然として言われるままに行動するだけだった。救急車が来て、救急隊員が妻を担架に乗せ、二階の分娩室から階段で妻を降ろそうとする。

「ご主人ですね。ここを持って抱えて！」

と隊員に言われ、妻の乗った担架の棒を担ぎ階段を降りる。救急車に乗ると、ベットに椅子を寄せ座った。妻は蒼白な顔色をしていだが意識はあり、目を開けていた。

「大丈夫だ！」

と、妻の手を握った。

救急車は真夜中の小倉の街をサイレン鳴らし疾走する。車窓には雨上がりの街が鮮やかに照り輝いて流れて行った。その光景は今でも映画の一シーンのように覚えている。

国立病院に着くと妻は集中治療室に入った。付き添って来たお産の先生が、

「私はこれで帰ります。赤ちゃんは私の方で面倒みますからご心配なく」

と引き上げようとする。私は独り広い待合室に残ることになった。妻が重大な事になるのか心配になる。

「妻の家の者を呼んだ方が良いでしょうか」

と恐る恐る訪ねた。

「その方が良いでしょうね」

と先生は言い残して帰って行った。

真夜中の3時に妻の実家に電話を入れ、来て貰うことにした。実家は佐賀で車を飛ばしても二時間はかかる。

私は誰も居ない待合室で物悲しく燈る赤い消火灯を見詰めながら待った。長かった。もし奈々子と私の二人になったら、いろんな思いが巡った。

夜が明けた。朝日がブライトの隙間から矢のように侵入した。外では小鳥のさえずりがした。看護婦さんが現われ、ブラインドをカチカチと音を立て開けると、私の名前を確認し妻の所へ案内した。その看護婦さんの平常な態度とゆったりとした歩調に、最悪な事にはならなかったと確信した。

治療室に着くと割烹着のような白衣を着せられ中に入った。妻はカーテンの中の治療

台の上に乗った間々だった。妻は私を見付けると、

「頑張り過ぎちゃった。早く生まなくちゃと思って力み過ぎちゃった」

と、照れ笑いをするように言った。

長いお産が終わった。妻は無事だった。輸血の準備をし、妻の体力の状態を見てギリギリの線まで輸血をするのを待った。と、国立病院の痩せ細った若い男性担当医から後々、聞かされた。それは本当にギリギリだったらしく、担当医は、

「竹の木をぐっと曲げて割れるか弾き返すかというギリギリの線の緊張した治療でした」

と表現した。　こうして奈々子は生まれて来たのだ。

※

奈々子は幼稚園に入るとピアノを習い始めた。それは山田さんの娘さんが自宅でピアノ教室を始めだし、マンションの子供たちに勧誘があったからだ。そしてもう一つ、サッカークラブに入った。それは私のせいだった。私は熱烈なサッカー狂で、私のために入ったのだ。

その年、プロサッカーのJリーグが始まりサッカーブームになった。私は学生時代にサッカーをやっていたので、このブームにのぼせていた。Jリーグのプラチナチケットを買うために朝早くから行列に並んだりしていた。当然、奈々子の練習を見学にも行った。奈々子は私の姿を見付けると微笑んでボールを追っかけていた。男の子の中で激しさに付いて行けないのだが、私が興味を持ってくれる事が嬉しそうだった。

そんな折、妻から話が持ち込まれた。結婚以来、妻を見て来て思っていたのだが、女性というか奥様方というものは、事あるごとに交友関係が広がる物だなと感心している。例を上げると、近所の奥様方は当たり前、保険所や病院で出会った妊婦仲間、幼稚園の母親仲間、食材の生協仲間という具合に次から次に広がり手を結ぶ。その奥様方のご主人というと、歯科医・自動車整備工・放送局・自衛官と多種多様にわたり、時折、奥様外交により恩恵を被ることがある。これは妻の才能かもしれないが、妻は気が小さいが愛想が良く社交的である。私の持っていない物を持っているので感謝している。そんな数有る妻の付き合いの中の一つからの話だった。徳力地区には奈々子が通うサッカークラブと、もう一つ強豪のクラブがある。そのクラブは小倉南少年サッカークラブといい、全国大会にも出場する有名なクラブで、あさひはそっちのクラブに入れようと妻と話していた。そのクラブから持ち込まれた話だ。

クラブは地元の幼稚園が運営母体になっており、練習場が無いという。幼稚園の小さな運動場を使っているが、小学六年生までのクラブなので、とても狭くて、近所の家から苦情が来るという。そこで自前で土地を購入し、グラウンドを確保しようと近所の大地主に頼むが、なかなか平坦な広い土地など分けてくれない。という話を、妻はクラブの後援会から聞いて来た。

その時、私は思い当たる物があった。それは私が仕事で関係している市役所の公園計画だ。モノレールの終点駅の志井という所に公園の計画をしている。それはとても大きな公園で、モノレール利用客を増やすため集客力のある公園を造ろうという計画だ。しかし、いまだに具体的な施設内容が決まっていない。何か集客の見込める良い案はないかと、公園課から相談を受けたことがある。その公園計画の場所とクラブは目と鼻の場所なのだ。

「小倉南クラブだったら志井公園の中に一部、サッカー場を造ってもらえばいい。今だったら聞いてもらえるかもしれない」

と、私は妻に話しておいた。

直ぐにその話はクラブに伝わったらしく、クラブの運営者である幼稚園の副園長から、私に電話を入れさせて貰って良いかという丁重な伝言が、妻から伝わって来た。クラブの切羽詰った状況が感じられた。私は前々から何かサッカー関係の役に立ちたいと思っていたので、私から副園長に電話をすることにした。そして幼稚園で逢うことにした。

幼稚園に着くと園長室に案内された。はじめ、副園長は役所の職員を食事に誘えないかと言い、また副園長の父親である園長は、そういうことは政治家に頼むのが一番だと言う。確かに世の中の常套手段だと私も思う。しかし、実際にやるのは末端の人間

で、誰の感情も害さない方が良い。下の方から提案して上に認められれば、やる気が起き、より良い物が出来るというものだ。

「いきなり議員じゃ役所も気を悪くするでしょうから直接行って、地域の子供たちのためにグラウンドを造って頂くよう、まずお願いしましょう。それから議員に頼んでください」ということにし、後日、公園課に案内することにした。

※

私は公園課にコンタクトを取りに行った。係長に小倉南少年サッカークラブと書かれた名刺を見せ、ここから頼まれたことを告げた。

「幼稚園バスを運転しているので、園児を送り届けた後、夕方四時ごろ伺いたいと言っている」

と話す、係長は始めは冷やかすような笑みを浮かべていたが、「地元からの要望であれば聞かせて頂きますよ」

と、かしこまって答えた。

翌日、副園長と市役所の1階ロビーで待ち合わせ、12階の公園課に昇った。私たちの姿を見ると係長は直ぐに課長に耳打ちし、応接席に面談の用意をしてくれた。係長は課長に話を通してくれていたらしく、席に着くと直ぐに課長が、

「志井公園ですか」

と、切り出してくれたので、副園長は話し易くなったのだろう熱弁を振るった。

このクラブを通して地域の子供たちの教育に努力して来て、もう十年になる事。子供たちに広いグラウンドでボールを蹴らしてやりたい事。小倉南は強いことが有名になり、他のクラブから試合を申し込まれるが、試合をする場所がない事。サッカーブームで生徒が3倍になった事。名簿とか嘆願署名が要るのであれば直ぐにでも揃える。そして出来るのであれば、大会が開けるよう2面の芝生のグラウンドが欲しいと要望した。

「芝が有るのと無いのじゃ、ボールタッチが全然違うんですよ」

と、身振り手振りで説明し、その姿は既に副園長ではなくサッカーコーチに成っていた。

私たちは話を終わると退席し、1階ロビーの休息席で話をした。後は今日の状況を議員さんに話してお願いすること。時折、自分でも誠意を持ってお願いに行くことが大事。そうすれば、早ければ2年後にはグラウンドが出来ているかもしれないと告げた。副園長は熱弁の後、興奮が冷めないのか宙を見て頷いていた。そして礼を言った。

私は、このサッカー場に付いていささか度を過ぎた行動をしたように思う。それはサッカーが好きだからだ。そしてサッカー場が出来た時の夢を膨らませていた。子供たちのミニグラウンドに一寸した土手のような観客席があって、その上には雨の日にも父兄が見れるように、ヨットの帆のようなテントが張ってあり、もちろんグラウンドは緑の天然芝。そんな立派な子供たちのグラウンドは他にはない。名前はキッズスタジアムではどうだろう。完成したら、鹿島アントラーズのフロントに居る学友に頼んで、ジーコに来てもらいミニサッカーをしてもらい完成祝賀式をする。そうすれば話題になる。

※

数日後、仕事で出掛けたついでに、副園長から預かった物を公園課の課長と係長に渡した。

「全国大会に出場するそうです」

県大会の結果表である。小倉南サッカークラブの宣伝に来たのだ。係長は、

「知っているよ。小倉南は頑張ってるね」

と、気安く受け止めてくれ、そして続けて言った。

「グラウンドの芝だけど人工芝じゃ駄目だろうね」

と、首を傾げる。課長が続けて、

「そうなんだよ。私も研修で鹿島の県営グラウンドに行ったりしたけど、天然芝の管理は難しいんだよ」

私はその言葉を聞いて安心した。サッカー場を造ることに前向きに研究してくれている。良い方向に向いているようだった。

※

なな子が小学校に上がり、あさひが幼稚園に入った。なな子はすでにサッカーを止めていた。私のために頑張っていたのだろうが、女の子の部員が減り、仲の良かった女の子と二人だったのだが、その子も止めることになり、なな子も寂しそうに止めたいと言うので、私は笑っていいよと答えた。

その頃、志井川の河川改修はすっかり終わり、あの問題者の老人のお陰で、新しい橋が架かっていた。その工事方法は住民感情を考慮したご丁寧な物だった。先ず、古い橋を撤去する前に、直ぐ横に鉄骨の仮設橋を造り、住民の生活道路を確保した上で、新しい橋に架け替えたのだ。橋の欄干には五月橋と草書体で刻んである。問題者の老人が名付けた橋名だった。

我が家は3階にあり、中空を行くモノレールと丁度同じ高さの視線にある。テラスから下を望むと五月橋の工事状況や地形が変わって行くのが良く分かった。蛇行していた川は真っ直ぐになり、埋められた川の跡に空き地が出来た。今度はその空き地が問題になった。

何処から聞き付けて来たのか、その空き地に市の施設で武道場が建つと言うのだ。マンションの住人は真正面に建てられては見晴らしが悪くなると、公園にして貰うよう陳情しようと言う。その先導者がまたあの老人だった。

「陳情書に署名してくれって、議員にお願いに行くから来れる人は来てくれって、人数は多い方が良くからって、どうする」

と、妻から陳情書を見せられ相談された。

「署名するのは良いが一緒に行くのは止めろ」

と、私は言っておいた。問題者の老人が首謀者だったというのもあるが、陳情しても無駄だと思ったからだ。第一、公園よりも武道場の方が良い。公園は聞こえは良いが、返ってシンナーを吸ったりする非行少年の溜り場になる。武道場ならば風紀は良い。公園を造るよう陳情しても対抗者が居る。それは何年も掛けて武道場を造るよう陳情してきた武道関係者だ。市もやっとの思いで立地場所を決め、さあ建設という時に、ひょっと出の隣接住人に反対されたからといって、そう簡単に断念するとは思えない。

「無駄だから止めろ。橋の時とは違うんだ。今度は対抗者が居る」

と言って、妻に説明した。妻は武道場が良いのか公園が良いのか悩んでいたが、私の言うとおりに署名だけして一緒に行くのは止めたようだった。数日経って、妻から老人に付いて行った奥さんからの話を聞くことになる。

五、六人で議員の事務所に出掛け、老人が説明し公園にするようお願いしたという。議員は早速その場で教育委員会に電話して、

「地元の住人が武道場建設に反対しているぞ」

と言い、検討してくれるよう言ったという。私はその話を聞いて、武道場が教育委員会の管轄なのだと知った。そして、遣る瀬無いもの感じた。

結局、マンション住民の武道場建設反対運動は報われず。半年ほどすると、(工事期間中ご迷惑をお掛けしますが、よろしくお願ひします)というチラシが、工事業者から廻って来て、空き地では武道場建設工事が始まった。

※

なな子はサッカーを止めた後も、ピアノ・絵画・書き方とたくさんの習い事に行っていた。妻は習い事が多過ぎないかと聞く。毎月の生活費を圧迫しているし、子供たちもゆっくりする間が無いだろうと言う。

「本人がやりたいと言っているもの駄目だとは言えないだろう。何でもやったら良い。子供たちのため生きてるようなものだから」

と、私は答えたが、また習い事が増えることになる。あさひがサッカークラブに入る。ただし、これだけは外の習い事とは違い。

「サッカーをやらない子はお父さんの子じゃないぞ」

と、脅しだった。週二回の練習日には仕事中にも関わらず幼稚園に行き、あさひのボールを追う姿を観察することになる。あさひは生まれた頃ほど巨大児ではなくなっていたが、同級生の中では体格はいい方でガッチリしていた。全体的に動きは鈍い。足は早くも無いが遅くも無い。並みの運動神経である。しかし時折、怒涛のようにボールに飛び込み相手を跳ね除ける。パワーがあり目を見張るものがある。あさひは気分やでいつもいつも頑張ることは出来ない。こつこつやる努力派ではなく、天才肌とは言い過ぎかもしれないが、思った時には素晴らしい能力を発揮する。それが私のあさひに対する感想だ。それはサッカーだけでなく、あさひは何事おいてもその様に思われる。

※

私の努める会社の事務所に、「J・リーグの川淵です」と電話が掛かって来た。それはJ・リーグの総帥、川淵三郎チェアマンその人だった。何故、そのような人から電話が掛かって来たかと言うと。小倉南サッカークラブの副園長から、サッカー場建設の陳情がうまく行ってないことを聞かされていた。理由は公園課の部長がスポーツをする公園は総合運動公園として別の場所に計画しているとのことだった。そこで何とか形勢を逆転しようと、有名人のチェアマンに手助けして貰えばと思い、FAXで説明文をJ・リーグ事務所に送信しておいたのだ。テレビで見受けると、ハッキリ物を言う実務派で、気取りの無い庶民派に見え、チェアマンなら対応してくれそうな気がしたからだ。

「お手伝いしますよ。ただ、芝のグラウンドは難しい。一編に望まずに、土でも良いからグラウンドを造って貰って、それが出来た後、芝を張る事を要望してはどうか」

と、チェアマンは言い。芝に付いてプロが使用する試合会場でも苦労している状態であること。そしてまた、それをやらないとヨーロッパのような芝の文化が育たない事も付け加えて言った。

私はテレビで耳馴染みのチェアマンの声が、電話口から聞こえのに感動し、自分からコンタクトを取っておいてだらしない話だが、上がってしまった。何をどうして良いのか分からず、忙しいチェアマンに来て下さいとは言い難く、取り敢えず陳情先に電話を入れて貰うことにし、また後日、相手先の連絡をするということで電話を切った。あ〜あビックリした。まさか電話が掛かって来るとは思わなかった。

私は副園長に連絡を取り、議員に役立てて貰うようお願いした。副園長も戸惑っていたが、そっそく議員に伝えますとのことだった。

その夜、私はチェアマンから電話があった事を友人たちに電話を掛けまくった。私の興奮状態は誰の目にも明らかだったらしく、妻は、

「いったい何人に電話すればいいの」
と、呆れていた。

※

ひと月ほどして副園長から電話があり、北九州市のサッカー協会会長の所へ一緒に行って欲しいと言うので、一緒に出掛けた。会長は中学の校長先生を退職され、市役所の観光課で事務をしている人だった。会長は陳情の結果を公園課から聞いて来られたらしく、それを私たちに伝えたかったのだ。

名目的には多目的広場となるが、サッカーが出来るようゴールを置き、ゴールを収納する倉庫も造るという。但し、芝は無し。志井公園は他の部分で芝生広場として整備するので、たまにはそこまでゴールを運んでサッカーをすれば良いと言われたそうだった。不満足ではあるが、とにかくサッカーが出来るグラウンドが出来ることになった。後々、副園長から聞かされたのだが、この幼稚園は議員の選挙区の支援母体だから、この陳情だけは特別に頑張ってもらった。議員が公園部長を強引に捻じ伏せた実態を説明された。何だか罪深きものを感じたが、とにかくサッカー場が出来ることは子供たちにとっては良いことなのだからと納得した。

この件で、私は市のサッカー協会会長とも面識が出来、協会が取り組んでいる北九州にプロサッカーチームを作る運動にもお手伝いさせて貰うことになる。協会では市内で一番強い社会人チームを、全国チームに押し上げる計画だった。私は九州リーグで頑張っているそのチームを何度か応援に出掛けた。しかし、そんな計画は市民の誰も知らない。このチームを市民に知って貰う事が重要だと思い、ケーブルテレビで試合を放送して貰うことにした。ケーブルテレビでは地元の催し物を放送する地元還元チャンネルがある。それに放送して貰うよう手紙を書いた。早速、テレビ局側からOKの電話があり、会長と協議して試合の撮影を行った。局側から実況アナウンサー、協会から元日本代表選手の解説者を出して貰い、本格的な実況放送になった。ただ違うのは観客がない事だ。その試合の様子は、その後ケーブルテレビで放送されたが、放送ソフトが乏しいのか一ヶ月ぐらい毎日、リピート放送された。

※

マンションの前に武道場が完成した。その時分、私はマンションの町内会長代理を勤めていた。なぜ代理かと言うと、会長が転勤で横浜に引っ越してしまい、同世代で仲良くしていた私たち、あと半年の任期だからと後を頼まれたからだ。その代理の私の元に、完成式典に地域の代表として参加するよう招待状が届いた。

式典当日の日曜日、天気は良く。久しぶりにテラスに出て徳力の町を眺めた。モノレールが音も無く徳力駅に吸い込まれて行く。モノレールは小枝を渡る芋虫に見える。車両に芋虫の着ぐるみを被せれば観光名物になるだろう。パチンコ屋の駐車場はなんと広いだろう。志井川は綺麗になった。兩岸は遊歩道だ。そういえば、内の技術者が歩道は土にしようと言ったと役所の担当と話した。アスファルトだらけの町並みに土の感触がほっとする。五月橋を渡ると大きな武道場が建っている。我が家は3階なので大きいと言ってもまだまだ見下ろせる位置にある。屋上が弓道場になっている。屋内は畳敷きの柔道場と、板張りの剣道場に分かれて、外装はコンクリートの打ちっばなしで、現代建築そのものだ。弓道場にかかる鉄の螺旋階段が、外壁にふっ付いている。ふと見ると、その階段を登って来る背広姿の初老の紳士がいる。見覚えのあるその男性は市長だった。市長は午後の式典の前に下見に来たのだろう。嬉しそうに見える。武道場を見回し、弓道場で関係者に的を指差され説明を受けている。市長の風貌は伝助人形みたいで風采は上がらないが、この市長によって北九州市は何とか持っている。民間の活力のないこの街は、公共工事が一番の産業と言っている状態で、建設省出身の市長は力を発揮している。何より夢のある計画を実現しようとする前向きな姿勢が好きだ。私は市長のファンだ。

午後になり式典に出掛けた。剣道場の板張りにパイプ椅子が並べられ、招待者がたくさん座っていた。記念品のタオルを貰うと椅子に腰掛けた。市長や教育長の話の後、司会者から柔道場の中央に掲げられた額に付いて説明があった。地元の著名な方から寄贈されたという。その人の名はあの問題者の老人だった。老人は自分で書いた書を額にして寄贈していたのだ。その二文字の書は何と書いてあるのか私には読めなかった。人に聞く気もしなかった。武道場建設反対の首謀者だった人の書が、武道場の中央に掛かっている。奇妙な話だ。

※

私はある事が気になっていた。川淵チェアマンのことだ。協力しますと電話をいただいてそのままになっている。私はことわりと結果報告を書き、またその後、協会の運動にも参加させて貰っていることをFAXで送った。するとまたチェアマンから電話を貰った。

「まずは第一段階成功したんですね。これからも頑張ってください」

と、ねぎらいの言葉だった。そして、北九州の社会人チームのリーダーはチェアマンの後輩だそうで。

「良い奴なので協力してやって欲しい」

との事だった。

私は早速そのリーダーに手紙を書いたのだが、一度きり電話で話ただけで暫く逢うことはなかった。それはリーダーがスペースワールドの営業本部長で、大変忙しくされており、その時分もパークの五周年記念の計画中とかで、多忙を極めておられたからだ。そのかわり市のサッカー協会の会長にリーダーの話を聞くことになる。それは会長が観光課を止められ、今はリーダーの好意で、リーダーの下でスペースワールドの営業部に席を置き、協会の仕事に専念されていたからだ。会長の話によると、リーダーはJ・リーグ開幕と同時に起きたサッカーブーム当時、北九州にもJ・リーグチームを作ろうと努力され、市の青年会議所と協力して、旗揚げの決起集会をスペースワールドで開こうとしていた。そんな矢先、福岡市がJ・リーグチームの誘致を発表した。アビスパ福岡の始まりである。そのためリーダーは、ここは同じ県のサッカー協会員として、福岡市の誘致が成功するよう協力しようと、北九州での旗揚げを断念した。リーダーの苦渋の選択の時代があったのだ。

その話を聞いた時、私は残念だった。そこまで行ったのならあとひと踏ん張り、しかし、あとひと踏ん張りが難しいのだろうか。ただ、そんな時、私はいつも思い出す言葉がある。

「夢は諦めさえしなければ必ず叶う」

四十五歳でボクシングのヘビー級チャンピオンに返り咲いたジョージ・フォアマンの言葉だ。

※

ある日、いつもの様に仕事から帰宅すると妻から相談があった。なな子とあさひが柔道を習いたいと言うので、どうすると言うのだ。妻はあさひの友だちのお母さんに、「子供が始めたからあさひ君もどうお！」

と、誘われたらしく、武道場に見学に行ったという。なな子とあさひは広い畳の上で転び回っている子供たちを見て、楽しそうに見えたのだろう。自分たちもやりたいと言ってるという。

「馬鹿なことを言うなよ。柔道は格闘技だぞ。チャラチャラした気持ちで始めると大事するぞ。止めた方が良い」

と、私は妻に言っておいたが。翌日、また仕事から帰宅すると家には誰も居なかった。食卓の上に「柔道場に居ます」と置き書きがあった。仕方なく階段を降りて武道場に様子を見に行く。武道場は完成式典から丁度一年が過ぎていたが、まだまだ真新しい館内に子供たちや指導者の元気な声が響いていた。玄関に入ると正面の壁に練習項目の週間日程と、見学大歓迎、生徒募集と書かれた黒板が掲げてあった。日程表には柔道・剣道・弓道・空手・合気道と様々な武術が並んでいた。そこには生きた体育施設が誕生していた。

玄関から直ぐの柔道場に入ると、赤い畳で大きく仕切られた二面の試合場があり、小学校低学年と上学年に別れて練習していた。入口に父兄が座れる板張りの見学スペースがあった。妻は私の姿を見ると直ぐに駆け寄って来た。

「ねえ、どうする。ほら、体験入学しなさいって言われて、道着を借りてやってるの」

と、なな子とあさひが道場の角で寝そべっている方を教えた。二人は畳に背中を付けて首を上げ、指導の先生の掛け声に合わせて、広げた両手で畳を叩き、受身の練習をしていた。二人は首を持ち上げることだけでも苦痛のようで、すでに嫌気な顔をしていた。

「だから言っただろ。そんなに甘くないぞって」

私が妻に小声で言うと、妻は恐縮するように苦い顔をした。

しかし、稽古が終わって二人にやるのかと聞くと「うん！」と頷く。意外な返事だった。私は心配そうに見守る指導者の先生の前で、これみよがしに、

「入ったらやめられんのやぞ！」

と、一喝するように言った。そんなことは無いのだろうが、何故かそうってしまった。子供たちは「うん」と頷くだけで何の躊躇もない。本当に分かっているのかと思いつつも、仕方がないので柔道を習わせることにした。

それから週に四回、子供たちは柔道場に通うのだが、予想通りに稽古は厳しく、小さい子供たちには辛いものだった。なな子は女の子の中でも更に女の子の子しており、とても向いてないと思い、二ヶ月ほどして顔を擦り剥いて泣いた日に止めさせた。

あさひは、妻の誘いで入部した幼稚園の友達が三人居たので、稽古は辛くても、友達と戯れながら何とか続けた。その内、道場内で練習試合をさせられるようになった。同じ歳のライバルとの取り組みは、小さいながらも懸命な戦い振りに、わが子を応援する私の心を震わせた。あさひも稽古は嫌でも試合になると張り切って戦い、動きが一段と良くなる。あさひの気分屋の性格である。何より、試合に勝ったら近くのコンビニでお菓子を買ってやるという約束が、その動きの良さを加速していた。そしてコンビニのお菓子は、辛い稽古を逃れようと武道場に行きたがらない時も、有効な手段となり、あさひ

の足を武道場に向かわせた。とは言っても、そんなに楽に柔道を続けさせられた訳ではない。あさひの手を引っ張り、引きずって行ったこともあるほど、私たち夫婦とあさひとの葛藤は凄まじい時もあった。

その間、道場では指導者の先生と父兄との間に争い事もあった。この道場は小倉南少年柔道クラブといい、長老の大先生がいて、その息子で三十歳代の鉄彦先生。そしてもう一人、四十歳代の迫先生がいた。初め鉄彦先生が上学年を、迫先生が低学年を指導していた。迫先生は優しい先生で、あさひたち幼稚園の生徒が言う事を聞かないで手をこまめしていた。そこで鉄彦先生と交代した。鉄彦先生は厳しい先生で、声が大きく、その声だけで生徒たちは恐怖心に震えるほどだった。子供たちは鉄彦先生の言うことを良く聞いた。稽古も厳しく、生徒たちが泣いてもその大きな声で制止し、ほとんど休むことなく濃密な練習だった。父兄たちは堪り兼ねて、大先生に訴えたのだ。厳しいのは良いが、幼児には幼児に合った練習方法があるのではないかと。父兄の申し出に大先生は先生たちで話し合いを持ったのだろうが、鉄彦先生ははぶけてしまい、暫く稽古に出て来なくなった。そこでまた迫先生が低学年を見ることで、なんとなく元の鞆に落ち着いた。

しかし、私は思うのだが、その鉄彦先生の厳しい練習期間が、あさひたち幼稚園児の柔道の基礎を作り、実力を付けたように思う。

※

北九州の少年柔道連盟の大会が半年に一度行われていて、あさひが小学校一年生になると、直ぐに大会がある予定になっていた。大会の日までは頑張って柔道を続けさせようと、夫婦で話し合っていた。そして、小学校に上がり何とか大会の時を迎えた。あさひの実力は道場の一年生の中では、三番目が四番目の実力だった。大会は各道場で一年生から六年生まで学年ごとに一人ずつ選出して、代表チームで戦う団体戦と、全員が参加できる個人戦があり、道場では団体戦に出場する選手の選考会として、道場内で選考試合を行った。あさひは張り切って戦い健闘したのだが、まだまだ技が身に付いてなく決め手がなく代表選手に選ばれなかった。大先生の代表選手に成れなかったあさひへの慰めの評価は、

「あさひが一番元気が良く、柔道で一番大事な気迫を持っている」

だった。しかし、あさひは怒っていた。代表選手になれなかった事を悔しがっていた。私はマンションに登る階段であさひの肩を抱き寄せ、

「個人戦で頑張れば良いじゃないか」

と、励ました。私は選考会でのあさひの頑張りに十分満足していた。しかし、あさひは余計に膨れっ面をした。負けん気だけは強い。

私は教会にも行かないし、キリスト教徒でもないのだが、大会の前日、寝床で明日の幸運を祈り胸で十字を切って神に祈り、眠りに就いた。

※

当日、私たち家族は朝早くから車で隣町の武道館に向かった。四十分はかかる道のりの中で、

「今日は何でいく？」

私はあさひに柔道の技のことを聞いた。するとあさひは、

「背負い投げ！」

と、素早く返事した。私はあさひが緊張しているのではないか心配していたが、そんな素振りはない。それどころか、道路沿いのコンビニやオモチャ屋を見付けては、あそこへ寄れとうるさい。結局、コンビニでジュースと百円のゲームカードを買う。

試合会場の武道場には、沢山のチビっ子柔道家と父兄でごった返していた。小倉南道場の仲間が何処に居るのか探すのが大変なくらいだった。

先に団体戦が行われ、あさひは仲間の試合を見もせずに、広い館内を遊び回っていた。団体戦が終わり個人戦が始まると低学年順に行われ、あさひの一回戦は直ぐに始まった。

一、二回戦は簡単に一本勝ち。他の道場に比べ、わが道場の実力は高かった。あの鉄彦先生の厳しい練習が効いていたのだ。特にあさひたち一年生は人数が多く、ライバルに揉まれ実力が上がっていた結果なのだろう。鉄彦先生も迫先生も手を叩いて喜んでいて。準々決勝、準決勝はわが道場の一、二番の子と同門対決になってしまった。あさひはいつもこの二人には道場での練習では分が悪い。特に準決勝は団体戦の代表選手、因縁の対決だ。あさひはこの日、何かが突き抜けていた。もともと実力差は、さほど無い。組んでは素早い背負い投げで潰れる。二戦とも背負い投げの連発で、あさひの速さと勢いは相手の子に何もさせずに、三分間の試合時間が終わる。ポイントはなくあさひの優勢勝ちだった。結果、あれよあれよと四連勝し、決勝まで勝ち進んでしまった。

※

あさひは白い道着に赤帯をきりりと締め、道場の中央に決勝の相手と向き合っている。道場の館内アナウンスがある。

「一年生の決勝が終わりましたら昼食といたします」

お昼前の最後の試合だ。全員がこの一戦に注目している。

「あさひ頑張れ！これに勝ったら優勝だ！」

と、同じ道場で練習して来た一年生の子が、声が切れそうに叫ぶ。

「はじめ！」

審判の声と共にあさひは短距離走のスタートのごとくダッシュして突っ掛かって行く。相手はたじろぐが、さすがに決勝の相手、強い。どっしりと受けて下がらない。あさひは直ぐさま背負い投げ。しかし、相手に覆い被せられ潰れる。下になったあさひは、うさぎ跳びのように両足を跳ね上げ、でんぐり返し、相手はびっくりして尻もちをつく。こんな柔道見たことない。会場から妙な笑い声がする。あさひの握り手がスッポ抜けて一人で転んだ。猫の様に素早く立ち上がると、また背負い投げ。うつ伏せになったあさひの右手を取り、相手が逆手に返そうとする。危険技。

「まで！」

審判がストップを掛ける。

「はじめ！」

またあさひはダッシュして相手にぶつかる。勢い余って背中から横転した。あさひの一人相撲にまた笑い声がする。あさひは立ち上がると失敗した不安を目に浮かべる。しかし、あさひの勢いは止まらない。目まぐるしく動き回ると、それしか知らないかのように組んでは背負投げ。しかし、タイミングも何もない力まかせの投げで、決まりそうにない。どちらも決め手なしというところだが、元気だけはあさひが有り、このまま終われば優勢勝ちになるだろうと思った。試合終了間近、偶然、相手があさひの奥襟を持ち踏み込んで来たところをまた、あさひの強引な背負投げ、タイミングが合った。鉄彦先生の声が、

「よし、行った！行った！」

その声と共に、相手の体があさひの体に乗っかり、裏返しそうになる。横倒しになる。審判の右手がピクリと上がりそうになる。綺麗に決まらなかった。

「あさひ！今の背負投げ良かったぞ！」

鉄彦先生の大きな声が場内に響く。まるで今のはポイントだぞと言いたげに。また、あさひは突進して行く。背負投げで潰される。

「まで！それまで！」

審判が試合終了を告げる。主審は副審の所へ相談に行く。緊張感が道場を包む中、あさひは生え変わりの前歯が気になるのか、頻りに前歯を触り、相手と向き合って審判の帰りを待っている。審判が道場の中央に戻ってきた。

「優勢勝ち！」

あさひの方の手が上がる。ウォー！という声と拍手が湧いた。ビデオカメラから覗いていた、私の目頭が熱くなった。

あさひは礼を終えると、鉄彦先生に道場の中央で大会パンフレットを丸めた紙でポンポンと頭を叩かれ、手荒い祝福を受けると、会場の縁で見守っていた妻の方に背中を押され、両手を広げた妻の懐に抱き付くように倒れ込んだ。

※

私は表彰式で連盟会長から金メダルを渡され、嬉しそうに親指で撫ぜているあさひをビデオに撮る。

帰り道の車の中であさひに言った。

「凄く頑張ったけど、次の大会は、あさひを目標にみんな頑張ってくるぞ。優勝したんだからな」

続けて妻が言った。

「そうよ。あさひを倒そうと思ってみんなシャカリキになって来るよ」

あさひはびっくりした鳥のような表情で、

「次の大会、休む！」

私も妻も噴出して笑った。

「さあ、リンデンハイツへ帰ろう」

私たち家族は、我が家へと白い軽自動車に乗って帰っていきました。まだまだ家族の道のりは帰り道と同じように夢の途中です。

END